

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 6 日現在

機関番号：14701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520136

研究課題名(和文)幕末明治期における木版画の総合的研究：明治期の浮世絵版画を中心に

研究課題名(英文)A Study of woodblock prints in Bakumatsu Meiji Era: Focusing on ukiyo-e prints of the Meiji Era

研究代表者

菅原 真弓 (SUGAWARA, Mayumi)

和歌山大学・「教養の森」センター・准教授

研究者番号：10449556

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は「日本19世紀版画史の再構築」(基盤研究(C)、平成19～22年度)の継続研究として実施したものである。研究蓄積が乏しいこの分野において、対象を当該時期の木版画(浮世絵版画)にしぼり、幕末明治期における日本の浮世絵版画および木版技術をもって制作された新聞、雑誌の挿絵の全貌を作品調査および関連資料調査を通じて明らかにすることを目的とした。

本研究における最も大きな研究成果は、明治の浮世絵師・月岡芳年(1839～92)の画業全般に関する論文や関連書籍などを刊行したことである。

しかしその一方で、これ以外の絵師や同時代動向への目配りが充分であったとは言えない。これが本研究の反省点となった。

研究成果の概要(英文)：This study is one that was carried out as a continuation study of "A Study of Japanese Woodblock Prints in 19th Century" (Basic Research (C), 2007- 2010). Research subject is a woodblock prints of the Meiji era (ukiyo-e prints). And research purposes, as compared to the same period of newspaper and magazine illustrations and ukiyo-e prints, it is clear that for each of the aspects.

The most significant results in this study, is that it was published a number of papers and books on work in general Yoshitoshi Tsukioka (1839-92) drew.

However, on the other hand, it can not be said that the study on other painter and contemporary trends was sufficient. This was the reflection point of this study.

研究分野：美術史

キーワード：浮世絵 明治時代 木版技術 月岡芳年 豊原国周

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、「日本19世紀版画史の再構築」(基盤研究(C)、平成19~22年度)の継続研究として行ったものである。前研究では日本の19世紀の版画史全般をテーマとしたが、本研究では特に本研究遂行者の専門分野である明治期の浮世絵版画を中心に据えた。

研究開始当初の背景については、以下の通りである。

(1) 先行する研究課題「日本19世紀版画史の再構築」研究終了時においてもなお、幕末から明治期、特に1850年代以降の浮世絵版画に関する研究に進捗は見られていなかった。

(2) 通常用いられている時代区分である「近世」「近代」という枠組みが、連続する時間を生き、画作を行った絵師たちに関する研究の進展を妨げていた。

(3) 浮世絵版画に加え、銅版画や石版画、写真など複数の複製媒体が存在した当該時期であるが、これらを同時期の現象として見る考え方は存在していなかった。

研究開始当初における研究の動向について、また本研究の背景(経緯)について、以下は具体的に述べる。

本件研究者はこれまで一貫して、幕末から明治初期の美術作品と作家を研究してきた。それは、従来の日本美術史研究における時代区分のあり方が、特に幕末から明治初期に制作された作品、作家の位置づけを曖昧なものとしていたからである。そして「近世」「近代」という区分によって洩れ落ちてしまう作家、作品の研究は、それまでに構築されてきた日本美術史の隙間を埋める研究であると考えたからである。

本研究において取り上げる木版画については、旧論「月岡芳年歴史画考」(『美術史』141冊、1996年)、「『前賢故実』の波紋」(練馬区立美術館編『菊池斎翁と明治の美術』展図録、1999年)において、幕末明治初期を作画期とする月岡芳年の絵画表現の中に、近代日本画との接点を指摘し、旧論「名所」の変貌 小林清親「日本名勝図会」をめぐって」(菅原真弓編『名所の変貌』展図録、2003年、中山道広重美術館)では、技術における、また表現における連続性について指摘した。

こうした問題意識のもとに設定した先行課題「日本19世紀版画史の再構築」では、主に木版画に軸を置き、加えてこれ以外の複製技術、複製媒体について取り上げた。まず幕末から明治初年における木版画については、二つの主たる主題である「風景主題(名所絵)」と「歴史主題(武者絵、歴史画)」に軸を据えた学位申請論文「十九世紀日本版画における風景主題と歴史主題」を学習院大学に提出、2008年7月、博士(哲学)の学位を得た。そしてこの論文を単著『浮世絵版画の十九世紀 風景の時間、歴史の空間』(ブリュッケ、2009年)として刊行した。ま

た旧論「月岡芳年 幻想の中の江戸へ」(辻惟雄編『激動期の美術 幕末・明治の画家たち〔続〕』ペリカン社、2008年、共著)では、月岡芳年の画業の特徴を年代ごとに指摘しつつ、これまでの自身の研究をまとめた形で、芳年が前代から受け継いだもの、そして近代へと繋いでいったものについて、歴史主題を中心に明らかにした。

木版画以外の媒体については、明治初年のある時期において華々しい活況を見せた石版画を中心に、これと木版画、あるいは同時代、草創期の油彩画との比較を行った。旧論「技術とモチーフ 明治初年の主に版画における風景表現をめぐって」(『GENESIS(京都造形芸術大学研究紀要)』14号、2010年)では、石版画や草創期の油彩画と木版画が選んできたモチーフの類似性を作品を挙げて指摘をし、新しい技術がそれを普及浸透させるために選んだモチーフが、旧来(木版画が描いてきた)のものに抛らざるを得なかったこと、一方木版画自体も、たとえばこの石版画や油彩画、そして写真といった新来の技術の魅力を取り込むために、積極的にその表現方法を学んだことも明らかにした。

## 2. 研究の目的

これまでの研究蓄積が乏しいこの分野において、本研究では、対象を当該時期の木版画(浮世絵版画)にしぼり、幕末明治期における日本の木版画(浮世絵版画)および木版技術をもって制作された新聞、雑誌の挿絵の全貌を、詳細な作品調査および関連資料調査を通じて明らかにすることを目的とした。明治維新という大きな政治変動の渦中において、木版画はそれ以前と比べてどのような表現の展開を見せたのか、また当該時期において木版画とその技術が求められた用途と果たした役割について、他の複製技術との比較において、また同時代の美術作品、動向との比較において、その輪郭を明確にしていく。

これまでの自身の研究成果を踏まえた上で、本研究では新たに、そして改めて1800年代初頭からおよそ100年間の木版画の全貌を明らかにしたいと考えた。1800年代以降の木版画については、比較的多くの作品が残されているが、伝記事項等が明らかでない一部の作家を取り上げるにとどまっていた。たとえばそれは葛飾北斎であったり、歌川広重といった作家たちである。また上述した自身の研究以前に、当該時期、特に1850年代以降の木版画についての研究が非常に乏しかったのは事実である。たとえばこの時期を活躍期とする豊原国周について先行研究を探すならば、近い時期では、田島達也「豊原国周「皇国蚕之養育」をめぐる問題--明治前期美人画の一断面」(『史料館研究紀要』34号、2003年、国文学研究史料館)および1993年に開催された展覧会「豊原国周 最後の浮世絵師」(野田市郷土博物館)

の図録しか存在しない。そして、当該時期の木版画研究を行ってきたこれまでの自身の成果を振り返っても、当該時期のすべての木版画作品、作家についての詳細な検討を加えてきたとは言い切れず、この時期の木版画の歴史を編むには至っていないのが現状であった。本研究では、当該時期に発行された木版画作品の様相を、比較的著名な作家ばかりでなく、伝記事項が明らかでない作家の作品の精緻な検討も行い、これまでにない初の19世紀木版画史、浮世絵史を編むことを目的とした。なおその際、冒頭に記したように他の複製技術、同時代の他分野の美術動向との関係を視点に置くことは自明である。

### 3. 研究の方法

幕末から明治期にかけての木版画（浮世絵版画）分野における中心的存在であったのは、歌川派である。始祖歌川豊春以来、時代の中核を担ってきたこの派は、明治期に入っても中心的存在であり続け、明治初年を活躍期とする月岡芳年の門下を介して、近代日本画との接点を持つ。本研究では、明治期における歌川派の作家たちの作品調査、伝記事項調査と検証を柱として据えた。江戸期の歌川派の作家たち 豊春、豊国、豊広、国貞、広重、国芳 の画業をまとめた研究として著名な飯島虚心『浮世絵師歌川列伝』（1941年、畝傍書房 中央公論社から文庫として1995年再版）を踏まえた上で、明治期における歌川派の作家たちの画業をまとめる研究を行い、いわば『近代歌川列伝』と称することができる成果としてまとめることを企図した。具体的には、修士論文以来の研究対象である月岡芳年に加えて、豊原国周、落合芳幾を新たに対象とし、作品および資料調査を実施してその画業の全体像を明確にする。芳幾については、近年、たとえば岡本祐美「落合芳幾 その人と画業」（『北海道教育大学紀要』53巻2号、2003年）や鈴木いつか「落合芳幾 その生涯と幕末明治における画業の意義」（『文化学研究』11号、日本女子大学文化学会、2002年）などの研究があり、これらを踏まえた上で考察を進めることとした。また芳年門下の右田年英、水野年方、国周門下の橋本周延作品についても、作品調査を行うこととした。彼らとさらに彼らの門下が活躍の場とした新聞、雑誌などの調査をも行うことで、大量頒布媒体への進出と、いわゆる浮世絵の師系に連ならない同時期の木版画作家、作品についても考察を加えるという方法を取った。

### 4. 研究成果

明治期の木版画、特に浮世絵版画を中心に据えた本研究であったが、研究の途上において、修士論文以来の研究対象であった月岡芳年について研究書をまとめる事を決意したため、当初の計画とはやや異なった方向の成果を挙げてしまったと言わざるを得ない。

当初は、これまでの研究を基盤とし、さらに明治期の浮世絵師たちの作品、文献の調査を通してまとめた成果として『近代歌川列伝（仮称）』を上梓する事としていた。しかし研究期間内の2012年に、月岡芳年の没後120年という年を迎えた事もあって、上にも記した通り、芳年個人の研究へと大きくスライドしていくこととなった。詳細は以下に述べるが、芳年研究に関しては『評伝 月岡芳年（仮題）』と題した単著として刊行することとしたい。

研究初年度にあたる2011年には、全国の所蔵機関に加え、所属研究機関（京都造形芸術大学）が所蔵する浮世絵版画作品の精密な調査を実施し、これを調査報告書として学内紀要に発表した。また月岡芳年の初期作品「和漢百物語」全点の解説および論考を掲載した『謎解き浮世絵叢書 月岡芳年「和漢百物語」』（二玄社）を刊行した。

続く2012年は既に記した通り、月岡芳年没後120年の記念すべき年となった。この頃より、研究の方向が芳年の単独研究へと大きくスライドしていくこととなった。まず学内紀要に「月岡芳年美人画考」（同年11月刊行、入稿は5月）を発表、次に「月岡芳年と明治の媒体（メディア）」を、没後120年を記念した太田記念美術館の展覧会図録『没後120年 月岡芳年展』に（同年10月刊行）そして「月岡芳年と江戸」を、『浮世絵研究（太田記念美術館研究紀要）』3号（同年11月刊行）に発表した。また月岡芳年と土佐（高知県）の絵師・絵金との関係について述べた口頭発表「月岡芳年と絵金」（明治美術学会、「絵金 極彩の闇」展シンポジウム、於・高知県立美術館）を10月に行った。

一方、所属研究機関である京都造形芸術大学の博物館・芸術館の学芸員を兼務し、同学が所蔵する豊原国周作品（大江直吉浮世絵コレクション）の調査を基に、展覧会を企画、実施した。京都造形芸術大学芸術館特別企画展「豊原国周～飛び出す国周と空飛ぶ菊五郎」を同年4月に、「コレクション展～国周と「歌舞伎十八番」」を同年11月に行った。

3年目にあたる2013年は、引き続き月岡芳年作品の研究を継続した。そしてこの頃より芳年作品の、ひいては当該時期の浮世絵版画がもつ「媒体性」に関心を傾斜させていくに到った。同年7月には「近代浮世絵が果たした役割～芸術性兼ね備えた報道媒体」を『産経新聞』文化面に、11月には「西南戦争錦絵という媒体（メディア） 月岡芳年作品を中心に」を学内紀要に発表した。また口頭発表（招待講演）として、安政大地震当時の木版画について検討した「江戸の天変地異と浮世絵」を行った（筑波大学創造的復興プロジェクト：カタストロフィーと芸術、2013年10月）。一方、豊原国周作品の作品調査を引き続き進め、かつ所属機関所蔵作品の研究を基に、「コレクション展～豊原国周描く文明開化の女性たち」（京都造形芸術大学芸

術館、6月)「コレクション展 ~京都四條南座「吉例顔見世興行」に寄せて~」(同上、11月)を行った。この年より豊原国周作品の本格的調査を開始し、併せて同時期の歌川派の絵師である歌川芳艶作品に関する文献調査を開始した。芳艶については、所蔵先調査をも行ない、翌年の作品調査を予定した。

最終年となった2014年は、これまでに遂行してきた豊原国周作品調査の成果を基に国周に関する研究を世に出した。その一つが、京都造形芸術大学芸術館特別展「劇聖 VS 明治の写楽~豊原国周描く九代目市川團十郎」であり、展覧会と同時に刊行した収蔵品カタログ『京都造形芸術大学所蔵(大江直吉浮世絵コレクション)豊原国周「市川團十郎演藝百番」』(京都造形芸術大学芸術館、共に1月)である。また、これまで全くと言ってよいほど先行研究がなかった国周について、研究史を網羅的に配し、その研究の流れを追い、かつ研究上の特色について述べた論文「豊原国周研究序説」(『GENESIS(京都造形芸術大学研究紀要)』18号、11月)を発表した。ここでは研究史だけでなく、史資料に基づく詳細な伝記を紡ぎ、かつ画業の特色についても触れている。展覧会実施や論文発表の傍ら、作品調査も継続して行い、かつ考察を深め、「豊原国周の大首絵作品について」と題した学会口頭発表(第68回美術史学会全国大会、於・岡山大学、2015年5月24日)を行うこととし、同時に論文「豊原国周研究 大首絵の構図を中心に」(『GENESIS(京都造形芸術大学研究紀要)』19号、2015年11月刊行予定、掲載確定)を入稿した。

また最終年は前述の豊原国周研究に加えて、2012年より続行してきた月岡芳年研究のまとめ作業を行った。修士論文に加えて、本研究期間に発表した月岡芳年に関する論文5編(うち1編は2008年刊行)を合わせ、先に記したように単著『評伝 月岡芳年(仮題)』として刊行することを企図した。章立ては以下の通りである。

第一章 語られてきた月岡芳年像(研究史)

第二章 月岡芳年の人生(伝記)

第三章 月岡芳年と「幕末」 同時代事象の中で

第四章 月岡芳年と「明治」

第五章 月岡芳年と「江戸」

終章 月岡芳年の位置

現在、このまとめ作業を続行中であり、本年秋季の段階には刊行の実質的準備(入稿)にとりかかる予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 8 件)

菅原真弓「豊原国周研究 大首絵の構図を中心に」(『GENESIS(京都造形芸術大学研究紀要)』19号、2015年11月刊行予定、掲載確定)、査読あり

菅原真弓「(コラム)紅嫌い」(『写楽と豊国役者絵と美人画の流れ』展カタログ、pp78、神戸新聞社、2015年1月)

菅原真弓「豊原国周研究序説」(『GENESIS(京都造形芸術大学研究紀要)』18号、pp69-88、京都造形芸術大学、2014年11月)、査読あり

菅原真弓「西南戦争錦絵という媒体(メディア) 月岡芳年作品を中心に」(『GENESIS』17号、pp96-110、2013年11月)、査読あり

菅原真弓「月岡芳年美人画考」(『GENESIS』16号、pp95-109、2012年11月)、査読あり

菅原真弓「月岡芳年と「江戸」(『浮世絵研究(太田記念美術館研究紀要)』3号、pp29-41、2012年11月)、査読あり

菅原真弓「月岡芳年と明治の媒体(メディア)」(『没後120年月岡芳年展』展カタログ、pp163-169、太田記念美術館、2012年10月)

菅原真弓「【調査報告】京都造形芸術大学所蔵浮世絵コレクションについて」(『GENESIS』15号、pp96-103、2011年11月)、査読あり

〔学会発表〕(計 2 件)

菅原真弓「豊原国周の大首絵作品について」(第68回美術史学会全国大会、於・岡山大学、2015年5月24日)

菅原真弓「月岡芳年と絵金」(明治美術学会、「絵金 極彩の闇」展シンポジウム、於・高知県立美術館、2012年10月)

〔図書〕(計 4 件)

神戸新聞社編、菅原真弓(作品解説、作家解説分担執筆、浮世絵年譜)『写楽と豊国役者絵と美人画の流れ』展カタログ、pp.173-188、神戸新聞社、2015年1月

菅原真弓編著『京都造形芸術大学所蔵(大江直吉浮世絵コレクション)豊原国周「市川團十郎演藝百番」』、pp1-28、京都造形芸術大学芸術館、2014年1月

山下裕二監修、菅原真弓(作品解説分担執筆)『日本美術全集 16 激動期の美術』pp231-235、239-240(小学館、2013年10月) 月岡芳年、落合芳幾、小林清親、井上安治、冷泉為恭、絵金などの作品解説)

菅原真弓『謎解き浮世絵叢書 月岡芳年和漢百物語』、pp1-76(町田市立国際版画美術館監修、二玄社、2011年7月)

〔その他：展覧会企画開催〕(計 5 件)

菅原真弓「劇聖 VS 明治の写楽~豊原国周描く九代目市川團十郎」、京都造形芸術大学芸術館、2014年1月

菅原真弓「コレクション展 ~豊原国周描

く文明開化の女性たち」京都造形芸術大学芸術館、2013年6月

菅原真弓「コレクション展 ～京都四條南座「吉例顔見世興行」に寄せて～」同上、2013年11月

菅原真弓「豊原国周～飛び出す国周と空飛ぶ菊五郎」京都造形芸術大学芸術館特別企画展、京都造形芸術大学芸術館、2012年4月

菅原真弓「コレクション展 ～国周と「歌舞伎十八番」」同上、2012年11月

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

菅原 真弓 (SUGAWARA MAYUMI)

和歌山大学・「教養の森」センター・准教授

研究者番号：10449556

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし